

Ⅲ オリンピック・パラリンピック招致に係わる諸課題について

調査目的

ロンドンオリンピック・パラリンピックは、ロンドンプランに基づいたソーシャルインクルージョン（Social Inclusion）を掲げて招致に成功し、2012年の開催に向けて準備を進めている。このロンドンオリンピック・パラリンピックを調査することによって、2020年の東京招致への課題を明らかにし、招致戦略へと活かすため以下のとおり訪問した。

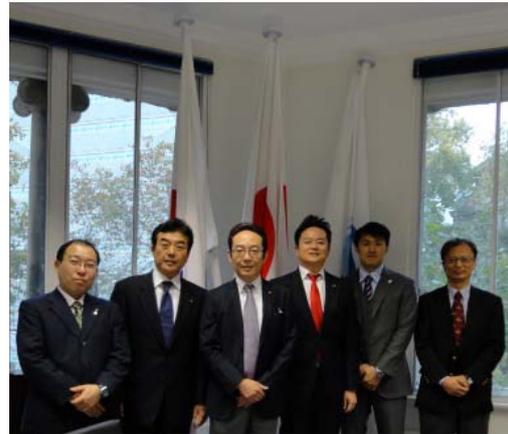
ロンドン市役所では、ロンドンオリンピックの課題として Transport for London（ロンドン市交通局）の Rhodri Ball 氏、オリンピック会場の現地視察に際しては、Olympic Delivery Authority の External Relations Executive の Miki Bhalla 氏、2012年のロンドンオリンピックに向けた日本の戦略的情報拠点である N A A S H ロンドン事務所の田村寿浩氏、松葉大輔氏、招致に取り組む在英日本大使館の林景一大使、ジャパンハウスが設置される 4 ハミルトンプレイスの Royal Aeronautical Society の Chief Operating Officer の Jonathan Byrne 氏ほかと会談し、ロンドンオリンピック・パラリンピックの状況についてヒアリングを行った。

ドイツでは、ベルリンとミュンヘンにおいてオリンピックが開催された会場を訪問し、オリンピック開催後の会場の活用について、東京招致における会場の活用のあり方を招致戦略へと活かすため、以下のとおり訪問した。

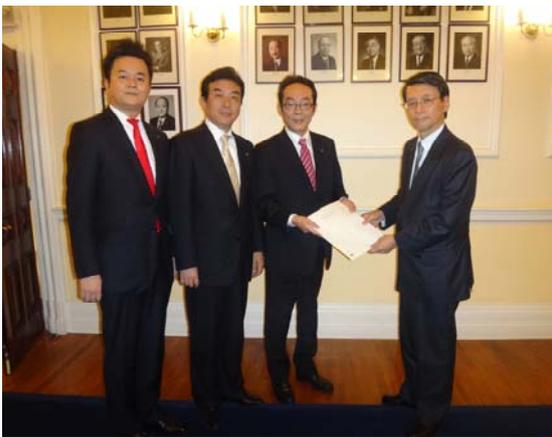
ミュンヘンオリンピックパークでは、Deputy General Manager Head of Communication である Arno Hartung 氏ほかと面会し、ヒアリングを行った。



▲ Transport for London
の Rhodri Ball 氏



▲ NAAASH ロンドン事務所
田村寿浩氏、松葉大輔氏
JOC 石川宣治氏



▲ 在英国日本大使館の林景一大使



▲ Royal Aeronautical Society の
Jonathan Byrne 氏



▲ ミュンヘンオリンピックパークの Arno Hartung 氏

1 ロンドンオリンピックについて
 (1) ロンドンオリンピックの概要

概要

1. ロンドン五輪

- 夏季五輪として30回目の大会
- ロンドンでの五輪開催は3回目(1908年、1948年に開催)

2. 日程・・・2012年7月27日～8月12日

3. 競技種目・・・26競技

陸上	柔道	レスリング	テニス
体操 (体操、新体操、トランポリン)	水泳 (競泳、飛び込み、シンクロ、水球)	ボクシング	バレーボール (バレーボール、ビーチバレー)
ボート	バスケットボール	サッカー	セーリング
ウェイトリフティング	ハンドボール	自転車	卓球
馬術	フェンシング	ホッケー	射撃 (ライフル射撃・クレー射撃)
近代五種	カヌー	アーチェリー	バドミントン
テコンドー	トライアスロン		

4. 会場

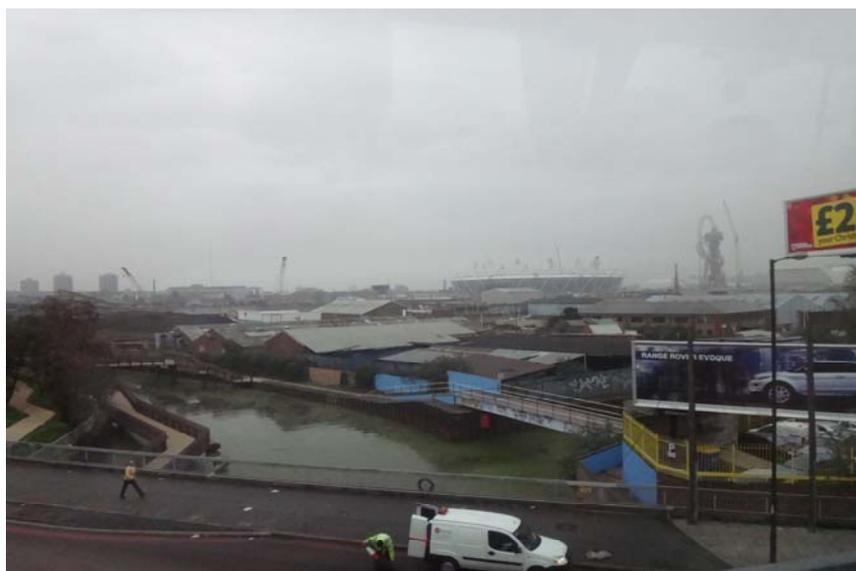
- ロンドン東部のストラトフォード駅(ロンドン地下鉄、ロンドン地上鉄道、英国鉄道、DLRが乗り入れ)に隣接して建設されるメイン会場、水泳会場等を中心に競技が開催される
- セーリングなど一部サテライト(遠隔地)会場で競技が行われる

(出典：N A A S Hロンドン事務所資料)

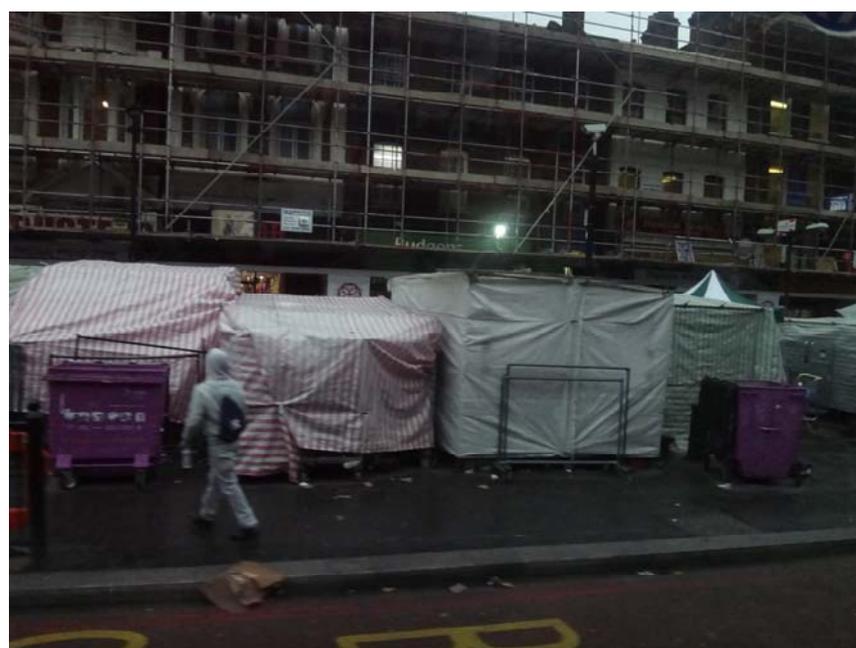
ロンドンオリンピックは夏季五輪としては30回目の大会となり、ロンドンでの開催は1908年、1948年に次いで3回目となる。ロンドン市民が「成熟社会が迎える3度目のオリンピック」という認識を持っていることが調査のなかで示された。開催期間は2012年7月27日～8月12日で、26の競技が行われる。1908年、1948年はロンドン西部で開催されたのに対し、2012年はロンドン東部を中心に開催される。ロンドン東部は、移民が多く、所得層が低い貧しい地区であり、開発が遅れている地域である。この地域の出身者であるサッカー選手のデビット・ベッカムが、ロンドンオリンピック招致のプレゼンターを務めた。

ロンドンオリンピックは、ロンドン東部の活性化のためにオリンピックを招致し、整備する施設を、オリンピック開催後もその地域の振興のために、恒久的に活用するというコンセプトがある。そして、その地域の開発と振興によってソーシャルインクルージョンを実践するという崇高な理念を掲げている。

ソーシャルインクルージョンは、孤独や孤立、排除や摩擦に陥った人々を援護し、健康で文化的な生活の実現につながるよう、社会の構成員として包み込み、支え合うという理念である。EUやその加盟国では、近年の社会福祉の再編にあたって生じた失業や、所得の低さ、粗末な住宅、犯罪率の高さ、健康状態の悪さ及び家庭崩壊など社会的排除ともいふべき社会問題に対処する政策課題の中心とされている。

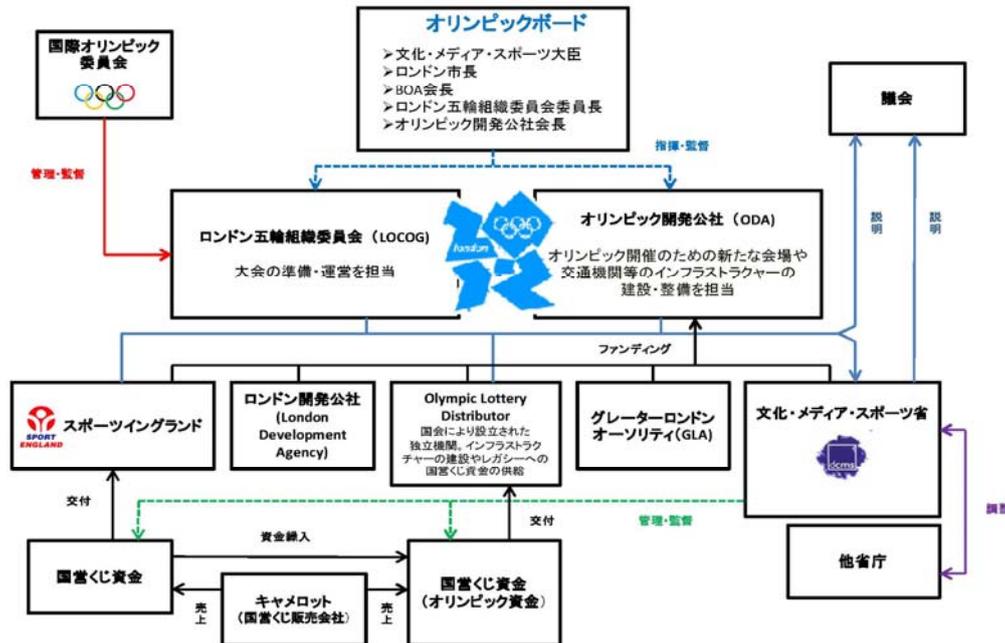


▲ ロンドンオリンピックのメイン会場周辺地域とリー川



▲ ロンドン東部地区

ロンドン五輪関連組織概要図



(出典：N A A S H ロンドン事務所資料)

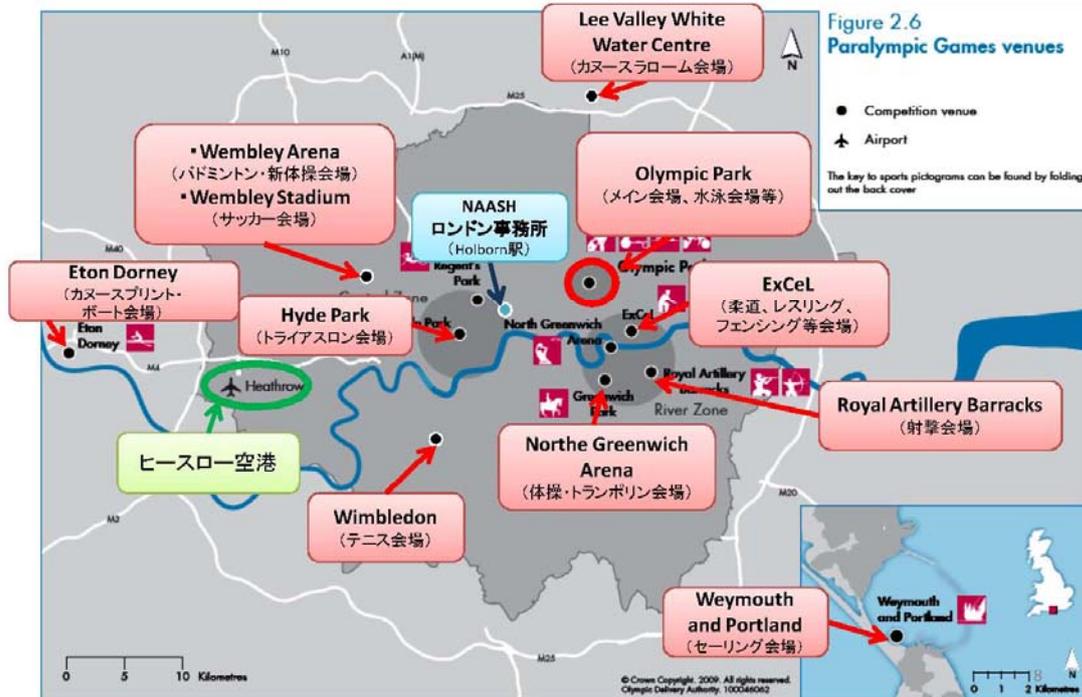
ロンドンオリンピックの組織概要として、オリンピックボードを中心に、ロンドンオリンピック組織委員会（LOCOG：the London Organising Committee of the Olympic Games）が大会全般の運営や競技を担当し、オリンピック開発公社（ODA：Olympics Delivery Authority）がオリンピックスタジアムを含む各種の会場や交通機関等のインフラ整備を担当している。

ちなみに、ロンドンオリンピック・パラリンピックのマスコットはウェンロックとマンデビルである。まず、ウェンロックの由来は、オリンピックの原型となったスポーツ大会がイングランドとウェールズの国境付近の町であるマッチウェンロックで地元の医師が中心となって開催されたことに由来する。そこに近代オリンピックの創始者であるクーベルタン男爵が行き、オリンピック開催のきっかけとなったことから名付けられた。次にマンデビルだが、ストック・マンデビル・ホスピタルという病院があり、そこでパラリンピックが初めて開催されたことに由来する。

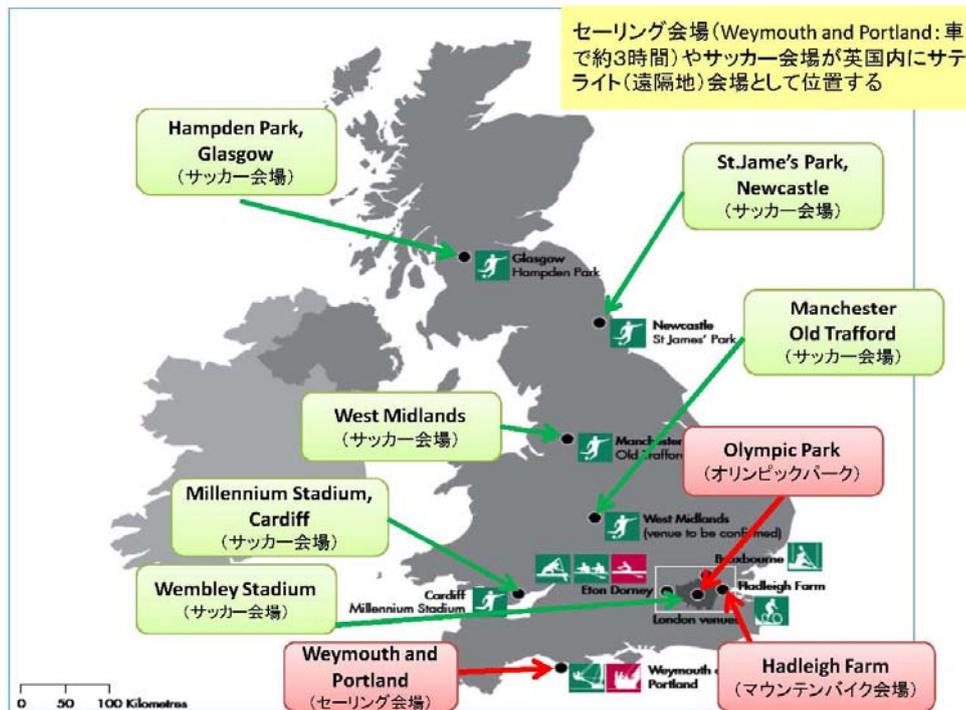
(2) ロンドンオリンピックの会場と取組について

会場はメイン会場となるオリンピックパークと第2会場となるエクセルを始め、ロンドン東部を中心に市内全域で開催される。また、サッカーやセーリングなどの競技がサテライト（遠隔地）会場で開催される。

ロンドンにおける主な会場



サテライト(遠隔地)会場



(出典：NAASHロンドン事務所資料)

Olympic Park(オリンピックパーク)立体図



ストラトフォード駅からの入場ルート

(出典：NAASHロンドン事務所資料)

オリンピックパークの面積は2.5km²となっており、周囲に整備された自然保護公園と住宅、オフィス、商業地区を加えると再開発総面積は7km²に及ぶ。オリンピックパークは大会終了後にはクイーンエリザベスパークと呼ばれる大都市公園になる。

この土地はオリンピックの会場に選ばれるまで、約100年間産業用地として使われており、200程の建築物があった。大部分が空き地であったが、過去に工業用地であった土地は、100年前は環境規制などなかったことから、化学物質等を地中にそのまま埋めていたため、まさしくブラウンフィールド(Brownfield)となっていた。ブラウンフィールドとは、産業活動等に起因した汚染土壌の存在、若しくは存在する可能性により遊休化した土地のことであり、土壌汚染が原因となって売却や再利用ができずに放置されている土地のことである。そのため、オリンピック会場として整備するに当たっては土壌改良を行い、ヒ素やダイオキシンなどの化学物質の除去を図った。全ての土壌を洗浄した上で85%の土壌を再利用している。加えて、建築物の解体に伴うレンガやコンクリート、鉄筋などのうち、92%がリサイクルされた。この土壌改良やリサイクルに当初予定していた予算額以上の費用を要することになる。



(出典：N A A S H ロンドン事務所資料)

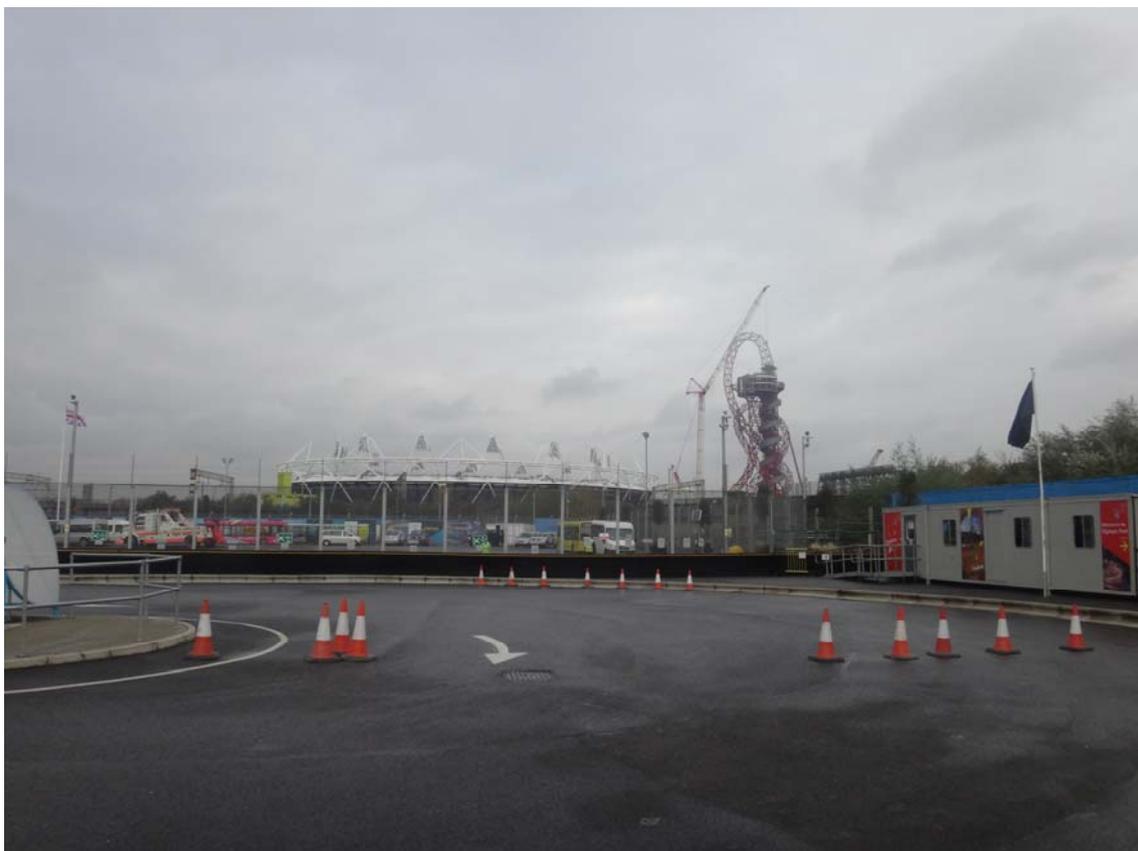
オリンピックパーク内には川や水路が縦横無尽に走っており、30の橋が架かっている。メインスタジアムは三方を水路に囲まれており、五つの橋が架かっている。リー川は6m幅広さ、開催期間中は船で来場できるようになっている。また、幅は建築用の資材を運ぶためでもあった。

オリンピックパークは完成後の2012年1月に組織委員会に引き渡される。この計画は2・4・1といわれ、計画2年、工事4年、テスト1年となっている。

オリンピックパークのエネルギー環境対策については、オリンピックパーク全体の暖房・冷房・ガスを供給するエネルギーセンターがメインスタジアムに隣接して設置されている。ボイラーはバイオマス燃料を使っており、冷却と加熱が一体となった熱交換方式となっている。また、オリンピック開催に当たってエネルギー戦略が立てられ、競技会場の省エネルギー化や再生可能エネルギーを利用した建物が設計されている。このオリンピックパークで使われるエネルギーの約20%が再生可能エネルギーで賄われる。オリンピックパークの北部に120mの風力発電機を設置し、約1,200世帯の電力を約1年間賄える電力を20年間供給可能なものとしている。また、上記発電施設以外の発電施設につい

でも、2006年の建設規制より20～25%程度の炭素を削減できる施設を建設することになっている。競技会場で利用される暖房などについてはソリッドウッドや木質ペレットが利用可能なバイオマス技術を利用したボイラーを利用するシステムの構築を始め、1日1人当たりの水の使用量をロンドンの平均使用量よりも20%削減することや、会場の建築資材の20%を再利用、若しくはリサイクルの資源とすることなどを定めている。

クリーンオリンピックを標榜し、オリンピックパーク内には駐車場を1か所しか設置せず、車ではなく公共交通機関や徒歩で来場してもらうように企図されている。ちなみに駐車場は来場者用ではなく報道機関用である。ODAはロンドンオリンピックでの公共交通機関の利用を奨励しており、オリンピックのチケットには公共交通機関のフリーパスチケットがついており、チケットの当該期日について、全ての公共交通機関を無料で利用することができる。パークアンドライドシステムを採用しており、チケットがあればシャトルバスも無料となる。また、駐輪場が整備され、パーク内は車の走行はできないが、自転車の走行は認められている。



▲ 建設中のオリンピックパーク

メインスタジアム横に会場のシンボルとなる赤い鉄骨を不思議なバランスで組み上げた高さ 115mの Orbit（オービット）と呼ばれる塔が建設され、展望台になっている。この建築物は大会終了後も残されて活用されることになっている。

大会期間中、オリンピックパークに入るにはチケットが必要になり、手荷物検査も実施される予定である。

2万人が収容できる報道センターも設置され、24時間利用できるようになっている。報道センターは大会終了後も残され、他の用途に活用できるよう融通性をもたせた設計となっている。大会終了後の用途は決まっていないが、ジャンボ機を5機収納できるほどの広さである。



▲ オリンピックパーク外観

オリンピックパークの建設に携わっている人の25%は地元の若者である。オリンピックパーク周辺には四つの区があり、いずれも低所得者が多い区である。建設に携わったことのない若者を新たに400人雇用して職業訓練と研修を行い、オリンピックパークの建設に従事させている。

Olympic Park(オリンピックパーク)

□ Olympic Stadium(メイン会場)

- ・開会式/閉会式 (7月27日/8月12日)
- ・陸上競技
- ・収容人数 最大8万人
- ・2011年3月**完成**



(出典：NAASHロンドン事務所資料)

メインスタジアムの収容人数は最大8万人で、1階席が25,000人、2階席が55,000人となっている。メインスタジアムはこの地を流れるリー川の水を使って島状に囲まれている。大会期間中は8万人を収容するが、白い鉄骨製の2階席である上部55,000席は大会終了後に取り外し、25,000人規模のスタジアムになる。スタジアムの上部は鉄鋼、下部はコンクリートであるため、解体しやすい鉄鋼部分を解体することになる。ロンドンには既に大きなスタジアムが三つあるため、そこに四つ目の大きなスタジアムがあっても使い道がないからである。これまでのオリンピックにおいても、大会後のスタジアムの使い道をどうするかという問題を抱えているため、今回は大きすぎて使いづらいといった問題を回避しようとしている。1階席となっている下部の25,000席は、80万tもの土を8か月もかけて掘ってボウル状にしており、大会終了後、陸上競技やサッカーにも使える設計となっている。風の影響を受けないため、好記録が期待されている。

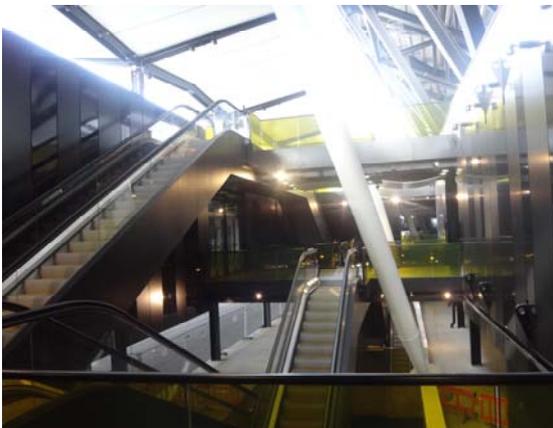
オリンピックスタジアムは、大会後にウエスト・ハムのサッカー場になるのではないかと考えられている。問題はスポーツに関係している団体・組織に多目的スタジアムを好まない傾向があるということが挙げられる。サッカーグラウンドの周りに陸上のトラックがあることを良しとしない。ただ、一つの競技に特化したスタジアムになってしまうと十分に活用されない恐れがあるため、複数の用途に使用できるようにしなければならないと考えている。また、ウエスト・ハムはマンチェスター・ユナイテッドほど資金力がないため、サポーターの数もさほど多くなく、単独でスタジアムを活用することが難しいことも関係している。



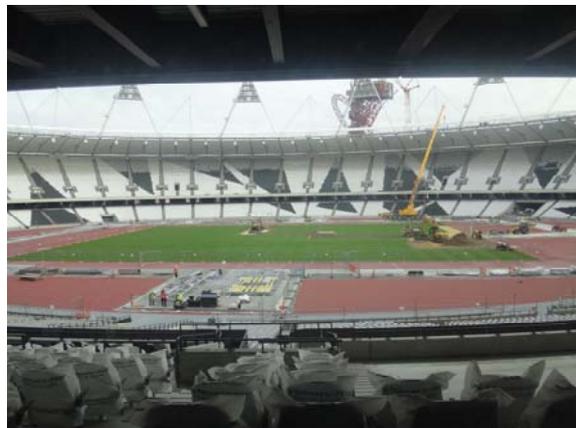
▲ メインスタジアム外観



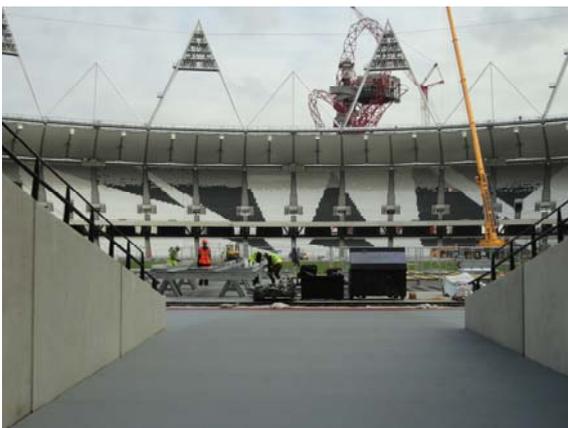
▲ メインスタジアム外観



▲ メインスタジアム内部



▲ メインスタジアム競技場



▲ メインスタジアム選手入場口



▲ メインスタジアム内トラック

□ Aquatics Centre (水泳会場)

- ・競泳 (7月28日～8月4日)
- ・ダイビング (7月29日～8月11日)
- ・シンクロ (8月5日～7日、8月9日～10日)
- ・収容人数 最大1万7,500人
- ・2011年7月**完成**



(出典：NAASH ロンドン事務所資料)

水泳の会場となるアクアティック・センターは最大 17,500 人を収容でき、競泳、飛込、シンクロナイズドスイミングが行われる。競泳用の 50m プールと飛込用の 25m プールが設けられる。イラクの女性建築家ザハ・ハディッドによる設計で、プール両側の座席数は、オリンピック期間中は 15,000 席（片側 7,500 席）であるが、オリンピック終了後は取り外されることになっている。その後は 2,500 席の屋内プール場として残されるが、他のスポーツイベントにも対応できるように 3,500 席に増やせる設計となっている。プールの屋根は 2,500 t のスチールできており、波をモチーフとしている。

□ Water Polo Arena (水球会場)

- ・水球 (7月29日～8月10日、12日)
- ・収容人数 最大5,000人
- ・2012年4月**完成予定**
- ・大会後、取り壊し



(出典：NAASH ロンドン事務所資料)

水球会場は最大収容人数が 5,000 人で、大会後は取り壊される。

□ Hockey Centre (ホッケー会場)

- ・ホッケー (7月29日～8月11日)
- ・収容人数 最大16,000人
- ・2012年3月**完成予定**
- ・大会後、Eton Manor 施設付近に移設予定



※上記写真は2011年10月のホッケーセンター初公開時のもの

(出典：NAASH ロンドン事務所資料)

ホッケー会場は最大収容人数が 16,000 人で、大会終了後はオリンピックパークの北に位置する Eton Manor の施設付近に移設される。

□ Basketball Arena (バスケットボール会場)

- ・バスケットボール (7月28日～8月10日)
- ・収容人数 最大1万2,000人
- ・2011年6月**完成**
- ・大会後、取り壊し



2011年バスケットボール
オリンピックテスト大会

(出典：NAASH ロンドン事務所資料)

バスケットボール会場は最大収容人数が 12,000 人で、大会終了後は解体され、2016年のリオデジャネイロオリンピックの会場に移設される。PBCマテリアルでできており、金属製のフレームにプラスチックを張った解体しやすい建物となっている。この建物は建築会社から借りているもので、終了後は同会社に返すことになっている。このバスケットボール会場に開会式前に選手が集合し、メイスタジアムまで行進することになっている。



▲ 周辺整備中のバスケットボール会場

□ **Handball Arena (ハンドボール会場)**

- ・ハンドボール (7月28日～8月12日)
- ・収容人数 最大7,000人
- ・2011年5月**完成**



(出典：NAASHロンドン事務所資料)

ハンドボール会場は最大収容人数が7,000人で、大会終了後も残されて活用される。ただし、ハンドボール専用の競技場としてではなく、他のイベントや競技ができる設計として造られている。外壁は全て銅で覆われており、屋根には88本のパイプが設けられ、外光を採り入れる設計となっている。さらに、水については雨水の利用などで40%に使用を抑えられている。

□ **Velodrome (自転車会場)**

- ・競輪 (8月2日～7日)
- ・収容人数 最大6,000人
- ・2011年2月**完成**



□ **BMX Track (自転車BMX会場)**

- ・自転車BMX (8月8日～10日)
- ・収容人数 最大6,000人
- ・2011年6月**完成**
- ・大会後、一部取り壊し



2011年BMX Supercross世界選手権

(出典：NAASH ロンドン事務所資料)

プリングル (Pringle) と呼ばれる自転車競技の Velodorome と BMX 競技場は自転車競技の会場で、共に最大収容人数は 6,000 人である。設計事務所はマイクロ・ホッキンズで、水の使用量は 44%カットされ、無駄な照明はなく、換気は全て自然換気的设计となっている。

(3) ロンドンオリンピックの選手村について



(出典：NAASH ロンドン事務所資料)



▲ 選手村となる Olympic and Paralympic Village の外観

選手村となる Olympic and Paralympic Village は 11 棟建設され、16,500 人の選手とオリンピック関係者に供される。大会終了後は 2,500 戸の一般住宅となり、そのうち半分は低所得者向けのアフォーダブル (affordable) 住宅として活用される。残りの半分はカタル王室に買い占められており、売却されるとのことであった。

当初は全て民間業者に委託する予定であったが、景気後退期を迎えたことで、当初のデベロッパーによる開発ができなくなった。結果的には政府が資金を拠出することとなった。しかし、不況ゆえに物価も下がり、建設コストも下がったため、予算より低い額で建設された (オリンピックスタジアム同様に他の施設についても言える)。オリンピック開発公社によって建てられたものであるが、予算を超えることはなかった。



▲ 中庭を中心として建設された選手村施設・後方が日本人選手団選手村

それぞれの棟は、中庭を中心として、その周囲に建てられており、中庭はフットボールのピッチと同じくらいの広さである。これほどメインスタジアムに近いオリンピック村が設けられたのは、ロンドンオリンピックが初めとなる。

選手村に隣接している緑色の建物は、オリンピック期間中は多目的に使用され、大会終了後は 3～18 歳の生徒が通う学校となる。上級生は主に演劇を勉強する学校となる。このような学校は、ロンドンのみならず、イギリス中に設置されている。



▲ 日本人選手団選手村室内

各タウンユニットにバスが一つ、五つのタウンユニットの中に四つの部屋があり、一つがリビングルームとなる施設であった。今回の選手村の視察については、JOCの強化本部に同行した。強化本部の委員からは、選手から部屋が狭いとの意見が多数寄せられたが、大会終了後に選手村がアフォーダブル住宅をはじめ公営・一般住宅として活用されることから、このような広さと規模となっているとのことであった。つまり、事後の活用やレガシーを前提とした設計なのであり、選手村一つをとってもソーシャルインクルージョンのための施策であることが理解できた。

(4) ロンドンオリンピックの課題について

ロンドンオリンピックの課題の一つに交通問題がある。ロンドンという都市自体の課題の一つが交通問題であるといっても過言ではない。ロンドン市内の道路事情は、計画立った道路とはとても言えないほど入り組み、渋滞が絶えない。また、鉄道の遅延が常態化し、世界最古の地下鉄の老朽化も著しい。このような交通事情を抱える中で、2012年のロンドンオリンピックは開催される。400万人もの観客が訪れるとされる開催期間中に、選手やスタッフ、さらには観客の円滑な移動や手段の確保は重要な課題である。DLR (Docklands Light Railway) や地下鉄の East London Line の延伸やジャベリン (P. 33 参照) の運行など様々な対策を講じている。ジャベリンが開業し、DLR が延伸することで、オリンピック開催期間中はオリンピックパークの最寄りにある3駅に、1時間に240本の列車が発着し、24万人を運ぶことができるようになることが計画されている。また、メイン会場であるオリンピックパークに隣接するストラトフォード駅には、ロンドン地下鉄、ロンドン地上鉄道、英国鉄道、DLRが乗り入れる。

ロンドンの交通機関

1. 地下鉄 (Underground)

- ゾーン制 (Zone1~9) を導入。市内中心地の Zone1 から郊外に向かって Zone の数が上がっていく
 - 主要場所の Zone
 - ✓ ロンドン事務所: Zone1
 - ✓ オリンピックパーク: Zone3 (中心地から約30分)
 - ✓ ヒースロー空港: Zone6 (中心地から約1時間)
- Oyster Card (オイスターカード) について
 - 地下鉄の移動には、切符以外に Oyster Card の利用が可能
 - 日本の Suica と同様チャージ式で、改札にタッチするのみ
 - 切符での移動より Oyster Card を使用した方が安価な運賃設定 (例えば、Zone1 から Zone2 への移動で切符の場合、£4.00 であるが、Oyster Card の場合 £2.50)
- 特徴
 - 時刻表は無く、構内掲示板などに何分以内に次の電車が来るか案内される
 - オリンピックパークに通じる Central Line は朝・夕のピーク時は 2~3 分に一本の割合、ピーク時以外も 5 分に一本程度の割合で運行される
 - 車両は小さく、日本のものより輸送量は少ない
 - 信号故障などによる遅延が頻繁に発生する。特に週末は、工事の影響で運休となる路線も多い。



2. DLR (Docklands Light Railway)

- ロンドン東部の再開発地域を走る地上鉄道
- 無人運転での運行 (日本の「ゆりかもめ」と同様にコンピュータ制御されている。)
- 車両は2両編成程度で、本数は比較的多い (日中10分に一本程度) が、輸送力は少ない
- ExCeL への移動手段として想定される
- Oyster Card の利用も可能



3. 英国鉄道 (National Rail)

- 旧イギリス国鉄を分割民営化し、現在は複数の民間会社が運行している。
- London St. Pancras 駅から Stratford 駅まで15分で繋ぐ路線がある (約10分に一本程度)
- 通常は、ロンドン市内から郊外に移動する場合に利用する
- サテライト会場 (Weymouth, Eton Dorney, Lee Valley 等) への移動手段として想定される
- 一部の路線で Oyster Card の利用が可能



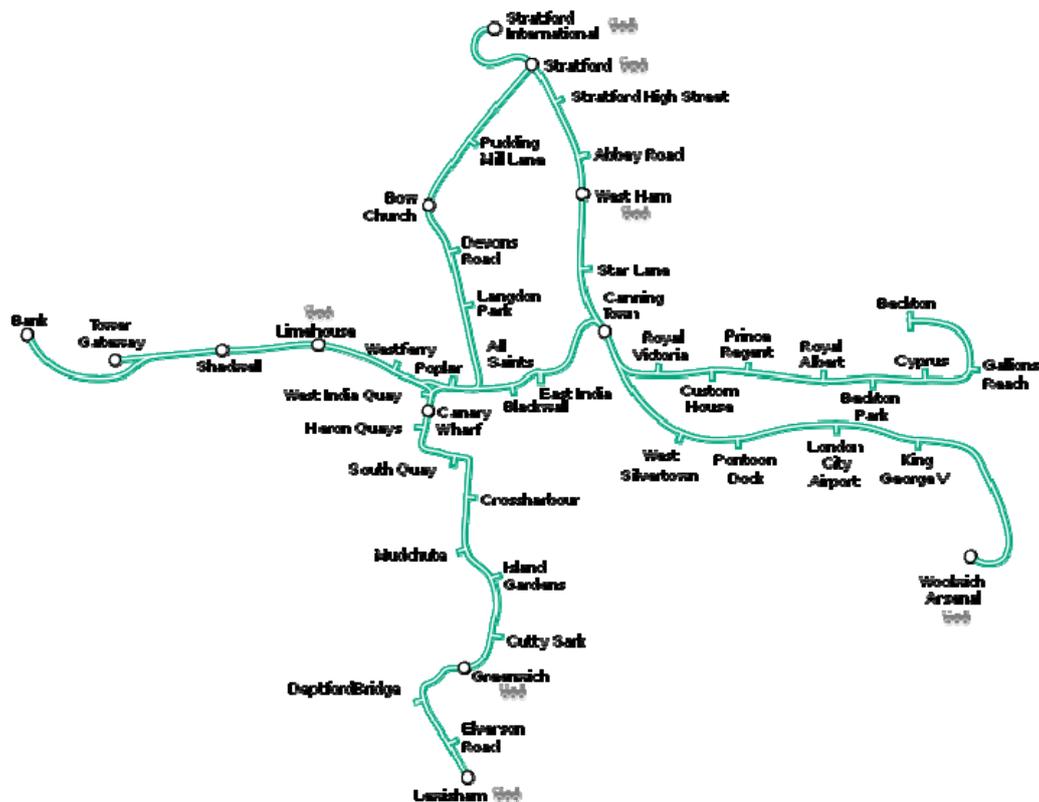
(出典: NAASH ロンドン事務所資料)



▲ Docklands Light Railway

DLRはロンドン東部ドックランズを走るライトレールシステムで、ロンドン中心部と、カナリーワーフ、ロンドンシティ空港、オリンピックの第二会場となるエクセル・エキシビション・センターなどの東部の主要地を結ぶ。一部区間はイギリス国鉄の廃線跡を活用して建設コストを抑えている。2012年のロンドンオリンピックに伴う旅客輸送を目的として、かつてのイギリス国鉄のノースロンドン線跡を活用してユーロスターが発着するストラトフォード国際駅への延伸が行われた。

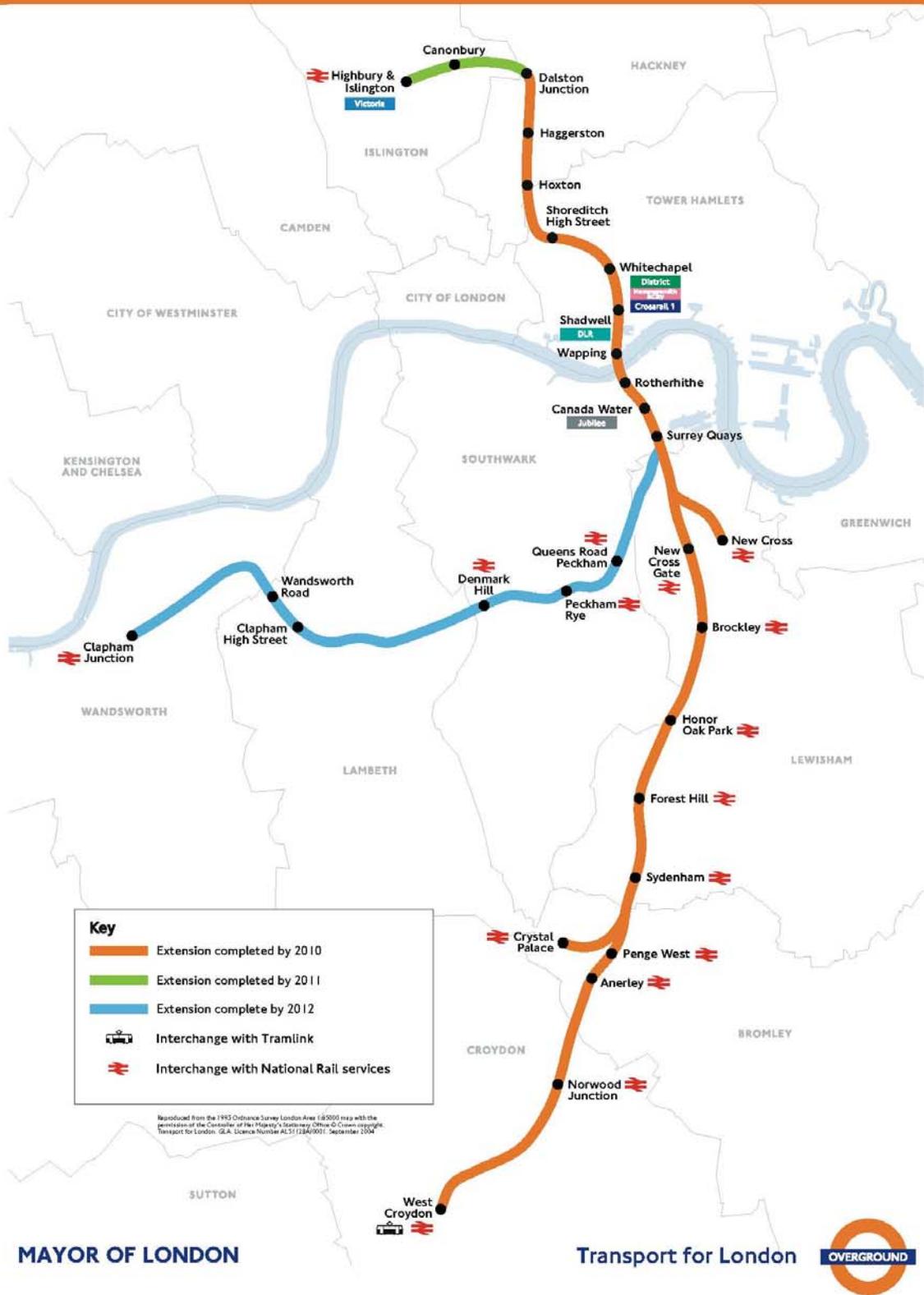
車両は日本のゆりかもめと同様にコンピュータ制御されているため、非常時を除いて無人運転で運行されている。また、ロンドン地下鉄とは異なり、信用乗車方式を採用しているため、改札は無い。駅員は一部地下駅を除いて基本的に配置されていない。また、全駅がバリアフリー化されている。



DLRの路線図（出典：Transport for London）

東ロンドン地域の公共交通機関を改善するため、East London Line も延伸された。ロンドン東部から Docklands を通って北部と南部を結ぶ East London Line は 10 億ポンドをかけて延伸された。まず、Shoreditch High Street（ショーディッチ・ハイストリート）駅、Hoxton（ホクストン）駅、Haggerston（ハガーストン）駅、そして Dalston Junction（ダルストン・ジャンクション）駅を新設し、Whitechapel（ホワイトチャペル）駅から Dalston Kingsland（ダルストン・キングスランド）駅の間がつながり、ロンドン東部から南部の New Cross（ニュークロス）駅、Crystal Palace（クリスタル・パレス）駅と West Croydon（ウェスト・クロイドン）駅まで 1 本で行けるようになった。続いて Highbury & Islington（ハイブリー&イズリントン）駅まで延伸された。Surrey Quays（サリー・クウェイズ）駅から、Inner South London Line（インナー・サウス・ロンドン・ライン）の Clapham Junction（クラップム・ジャンクション）駅を結ぶラインは、2012 年のロンドンオリンピックの前に開業予定となっている。

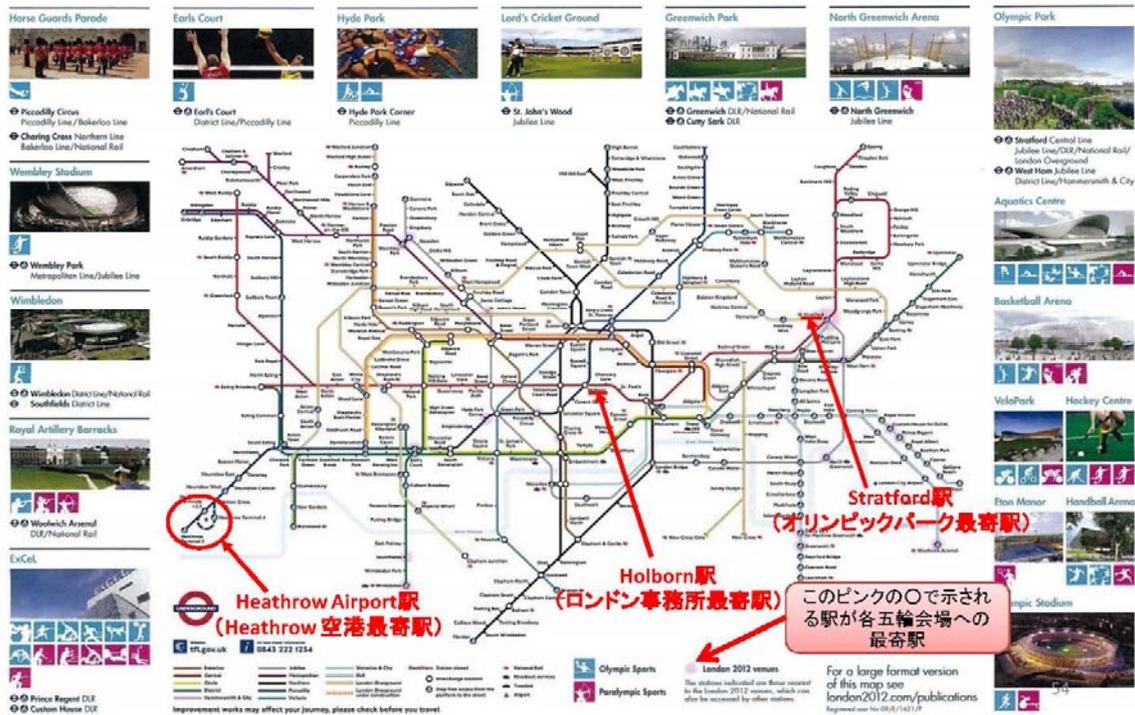
East London line extension



(出典 : Transport for London)

各会場の競技、最寄駅、乗り入れ路線が記載されている

ロンドン地下鉄路線図



(出典：NAASHロンドン事務所資料)

ロンドンの鉄道は、もともとそれぞれ独立した民間企業によって路線が作られていた。中心部には地下鉄があるため、鉄道は中心部に入らず、その周辺までとなっている。そういった中でロンドン中心部を南北に横断した鉄道が作られた。現在でも車両を増やし、発車本数を増やすための工事が進んでいる。

現在進行中の大規模なプロジェクトとして、ロンドン中心部を東西に横断するクロスレールプロジェクトという大規模な鉄道建設計画が進んでいる。開通予定は2017年とし、総走行距離は約120 km、地下路線の距離が22 kmとなっている。最高時速は160 km/hで運行され、ピーク時の運行本数は1時間当たり24本で、2～3分に1本の運行となる。さらに、八つの駅が新設され、17の駅が改修される。カナリーワフ駅も設けられ、非常に便利な路線となる。この路線のトンネルはすべて新たに建設される予定である。このトンネルの開通予定も2017年で、ロンドンの中心部では41 kmにわたるトンネルが設けられることとなる。

クロスレールプロジェクトの総建設費はおよそ190億ポンドで、日本円でおおよそ2兆5千億円にも上るヨーロッパ最大のプロジェクトである。このプロジェクトの特徴として、個人ではなく企業に対して課された固定資産税を運用す

ることが挙げられる。これはイギリスでは初めての試みとなる。具体的には、商業用不動産にかかる固定資産税の2%で賄われ、期間は24～31年かかると考えられている。

主要都市を通るこの鉄道プロジェクトが完成すると、不便だった鉄道間の乗り換えが可能となり、利便性が格段に向上する。



- オリンピック関係者(選手、審判、VIP、スポンサー、メディア)が通過するレーン。朝6時～夜12時まで。
- 会場近辺の道路での駐車や右折などが禁止される。また、横断歩道や信号を減らす予定。
- 試合が行われる日のみ制限される道路

参考：<http://www.london2012.com/olympic-route-network/where-will-the-orn-and-prn-operate.html>

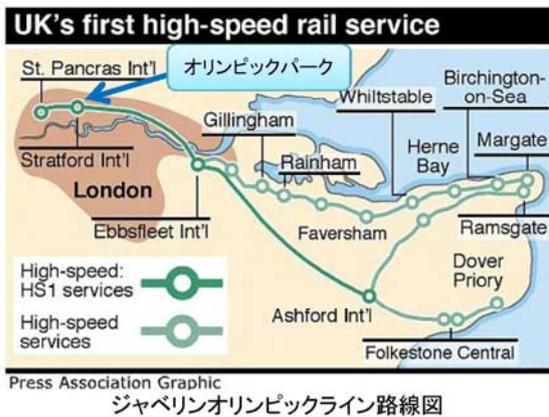
(出典：NAASHロンドン事務所資料)

道路整備についても、ロンドン市内各地において工事が行われているが、渋滞が一朝一夕に解消される状況にはなく、ロンドンオリンピック開催期間中においては、大会の円滑な運営のため、オリンピック関係者のみが通過できるオリンピックレーンを設けることになっている。上図に示されている通り、朝6時～夜12時までのほぼ1日の間に、選手や審判、IOC関係者やスポンサー及びメディアなどのオリンピック関係者だけが通過できる黄色いレーン。さらに駐車や右折が禁止される赤いレーン、そして試合の日のみ制限される青いレーンが設けられる。

このオリンピックレーンについては、ロンドンの道路事情を考えればやむを

えないと思われるが、ロンドン市民にとってはすこぶる不評であった。市民にとっては大会期間中に交通渋滞が増大することを不安視している。また、レーンの実際の運用においても相当の支障が出ることが予想され、ロンドンオリンピックの最大のトラブルになりうる。

Javelin Olympic Service (ジャベリン オリンピックライン)



St. Pancras駅
ジャベリンラインホーム

Stratford駅
ジャベリンラインホーム



ジャベリンオリンピックライン車体

	運賃
片道 (Anytime※1)	£5.40
往復 (Off-Peak※2)	£7.30
往復 (Anytime)	£9.20
1週間パス (7Day Season)	£27.10

※1. Anytime: どの列車でも使用可

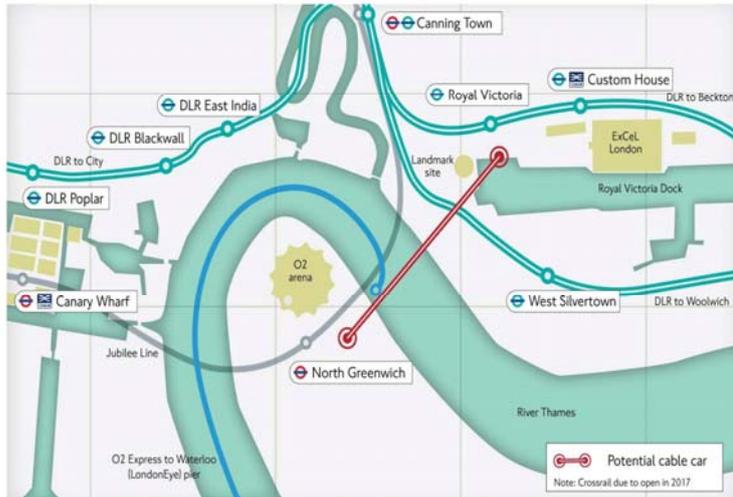
※2. Off-Peak: 混雑の少ない列車のみ使用可

- ・英国初かつ英国最速の、高速列車(時速140マイル/225キロ)。
- ・St. Pancras駅からオリンピックパークのあるStratford駅まで1駅、約7分で移動できる(通常の電車だと乗換1回、計7駅でおよそ30分)。10~20分おきに発着する。
- ・日本の車両メーカー、日立製作所が車体を作った。欧州において採用されたのは初めて。
- ・2009年12月より運行を開始した。

(出典: N A A S H ロンドン事務所資料)

ロンドンオリンピック開催中は特別列車であるジャベリンが運行する。ジャベリンは高速列車のシャトルサービスであり、1日に80万人の来場者が見込まれるロンドンオリンピックにおける公共交通サービスの中核となる。ロンドン中心部のセントパンクラス国際駅からオリンピックパークの最寄り駅であるストラトフォード国際駅を経由してエブスフリート国際駅までを結ぶ。1時間に4本、15分ごとに運行され、25,000人が利用可能となる。最高速度225 km/h(平均速度183 km/h)で運行し、セントパンクラス国際駅からストラトフォード国際駅までの所要時間は7分、ストラトフォード国際駅からエブスフリート国際駅までは10分での移動が可能となる。エブスフリート国際駅はダートフォードに近く、9,000台が利用可能なパークアンドライドが導入されている。

Emirates Airline (エミレーツエアライン)



- ・North Greenwichアリーナのあるグリニッジ半島とExCel会場のあるロイヤルドックスを結ぶ英国初の都市ケーブルカー。
- ・テムズ川の約90メートル上空を横断する。34機のケーブルカーには、それぞれ乗客10人までが乗車可能。
- ・片道の所要時間は約5分で、毎時2,500人の輸送を想定。
- ・完成時期は2012年夏予定。

(出典：NAASH ロンドン事務所資料)

ロンドンシティ空港近くのロイヤルドックスとグリニッジペニンシュラを結ぶケーブルカーが、ロンドンオリンピックの第2会場であるエクセルと North Greenwich Arena となるO2アリーナを結ぶ。

ケーブルカーのスポンサーにはエミレーツ航空が決まった。エミレーツ航空は10年間で総額は2億400万ディルハム、日本円にして約43億円のスポンサー料で契約した。

ロンドン交通局が2010年からスポンサーを募集し、ロンドンオリンピックの開幕前にオープンするケーブルカーが Emirates Air Line (エミレーツ・エアライン) の名でロンドンの上空を行き交う。

世界標準時の起点ともされるグリニッジ天文台とテムズ川を挟んで向かいにあるロンドンシティの空港近くを結ぶこのケーブルカーは観光名所としても期待され、途中駅もエミレーツの名前を付けた駅名になる。

(5) ロンドンオリンピック開催地ストラトフォードの再開発について



- ・オリンピックパークの隣に2011年9月に誕生したヨーロッパ最大の都市型ショッピングセンターウェストフィールド・ストラトフォード・シティ。
- ・19万平方メートルの敷地に、合計300軒の店が並び、70のレストラン、17スクリーンの映画館、ホテル3軒(客室合計617室)、カジノも備える。
- ・五輪期間中には、観戦客の75%が、ストラトフォード駅からショッピングセンターを抜けオリンピック会場へ入ると想定されている。

(出典：NAASHロンドン事務所資料)



▲ ショッピングセンターウェストフィールド・ストラトフォード・シティ



▲ ショッピングセンターウェストフィールド・ストラトフォード・シティ内

ウェストフィールド・ストラトフォード・シティ内ショップ

・ロンドン2012オフィシャルショップ

オフィシャルグッズを購入することができる。また、店内からオリンピックパークが一望できる。オリンピックオフィシャルショップとしては最大級の規模。ショッピングセンター内、John Lewis(ジョンLewis)3rd Floor(日本における4階)に位置している。



・ジャパンセンター

日本の食材を専門とする食料品店。お米、お茶などの飲料、醤油などの調味料はもちろん、おにぎり、てんぷら、かつ丼などの調理済み食品も手に入る。ショッピングセンターの中でも、選手村から一番近い場所に位置する。

(出典：NAASHロンドン事務所資料)

オリンピックの開催に合わせてオリンピックパークに隣接するストラトフォードシティの再開発が進められている。そのうちウェストフィールドショッピングセンターはヨーロッパ最大の都市型ショッピングセンターとして建設された。このショッピングセンターは 19 万㎡（東京ドーム 4 個分）の敷地面積に 300 の店舗、70 のレストラン、17 スクリーンの映画館、3 軒のホテルにカジノまで備えている。

この開発計画はオリンピック招致決定前に決まっていたが、オリンピック招致が決まったことで、規模がより大きく、そして施設はバラエティに富んだものとなった。しかし、このショッピングセンターには高額なブランド品などの店が入る予定はなく、日常生活に資する生活用品が豊富に取りそろえられることから、周辺住民に高く評価されている。

オリンピックが行われる周辺では、このような様々なプロジェクトが展開されている。これらはオリンピックのためのプロジェクトではなかったが、もしロンドンでオリンピックが開催されていなければ、これらのプロジェクトは実現しなかっただろうと考えられている。

また、グリーンウェイという遊歩道の建設も進められている。これは、もともとは 1865 年にできた下水システムの上に作られた 7km にわたる遊歩道であったが、それを改良したものがグリーンウェイである。下水道はレンガでできており、100 年以上経った現在でも機能している。かつては単に下水の上に土が盛られた道であったが、現在はさらに整備され、植林作業が行われ、標識や憩いの空間としてくつろぐ場所が設けられている。

その他にも、オリンピックパークから南へ向かうファットウォークという遊歩道の建設も進められている。ファットウォークという名称は、単純に（狭い）道というものではなく、きちんと幅を持った遊歩道という意味である。オープンスペースも備えている。

ロンドン東部は、今までは荒廃していた場所であったが、特徴的な構造物や歴史的建築物等も多いことから再開発し再整備しようとしているのである。

(6) ジャパンハウス



▲ 中央の建物がジャパンハウスとなる4ハミルトンプレイス
その左右に隣接するホテルにIOC・NOC委員が宿泊する好立地



(出典：NAASHロンドン事務所資料)

日本オリンピック委員会（JOC）がロンドンオリンピックで日本代表選手団の対外的な活動を行う統括拠点となる場所であり、オリンピック期間の2012年7月27日から8月12日の17日間設置される。ロンドンのハイドパーク近くに位置する「4ハミルトンプレイス」（王立航空協会本部のある会員制クラブ）の計4フロアを間借りし、関係者の対応や日本選手団の記者会見に使われるほか、2020年の東京招致に向けた活動拠点としても活用する。

国際オリンピック委員会（IOC）の関係者が泊まるホテルに近く、施設内には展示スペースを設けて日本の文化や観光名所を各国語で紹介をする予定になっている。IOC委員らを招き、レセプションや個別懇談などを通じて東京招致への理解を求めていく。

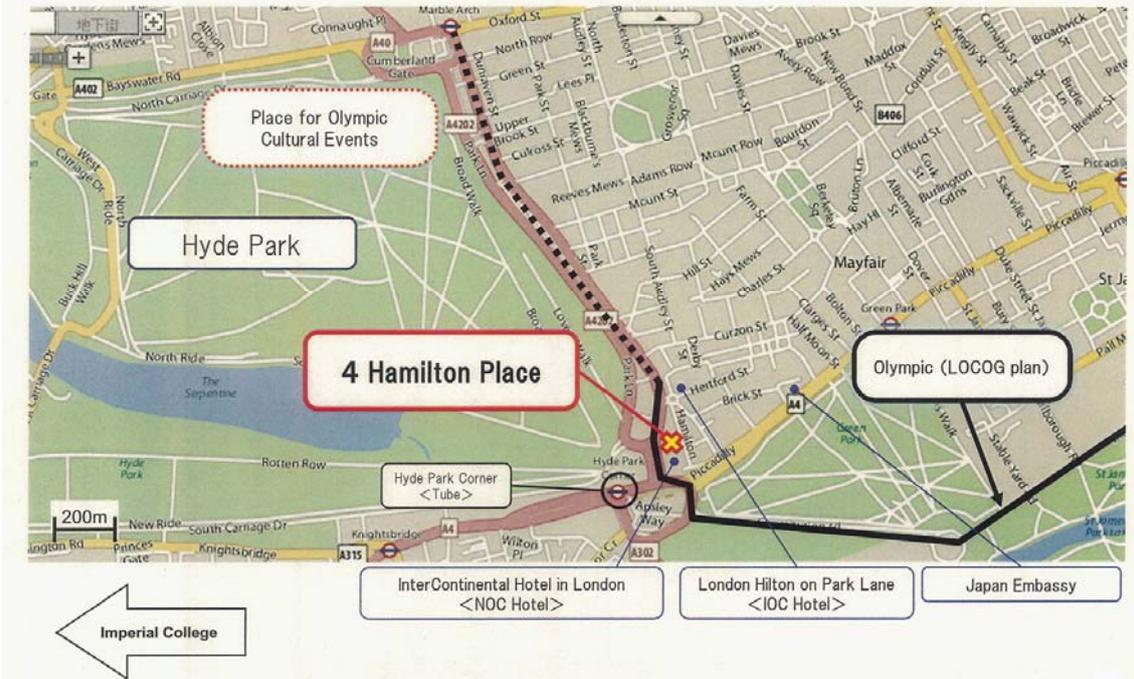


▲ 4ハミルトンプレイス Chief Operating Officer の Jonathan Byrne 氏と



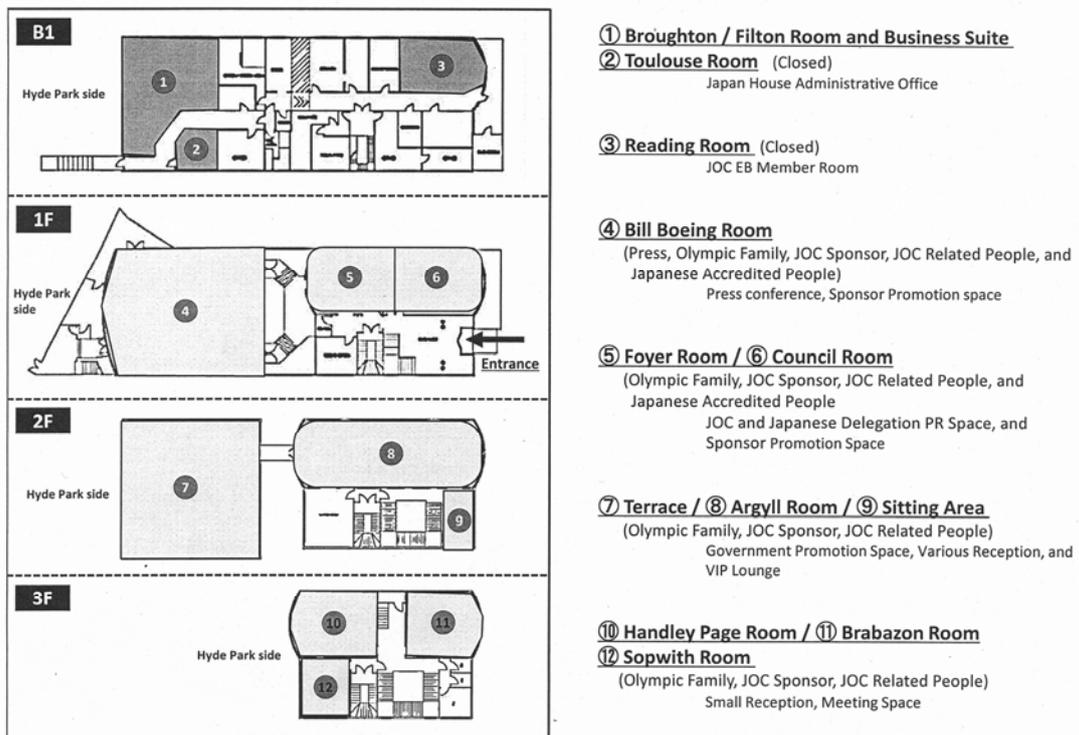
▲ ジャパンハウス室内

Map around 4 Hamilton Place



ジャパンハウス及びロンドンオリンピック関係機関・施設 (出典: JOC)

Japan House Venue Layout



ジャパンハウス内レイアウト図 (出典: JOC)

(7) まとめ

2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック（以下、オリンピック）は、都市としての哲学と思想をはっきりと示したオリンピックといえる。ロンドンプランにおけるソーシャルインクルージョンを体現し、地球的規模の命題である持続可能性（Sustainability）を追求したオリンピックである。さらに、それらの哲学と思想の下、ロンドンという都市の課題解決を大胆に図る契機としている。言い換えれば、それはオリンピックによって後世に残す遺産、つまりレガシーを生み出すことにつながっている。まさしく、世界的命題に取り組むとともに都市や地域の抱える課題解決の道標として、オリンピックをとらえようとするロンドンという都市の取組は、新しいオリンピック像を示しているともいえよう。再生可能エネルギーを活用し、オリンピック施設を再利用するなど、持続可能性についても改めて、世界の国々へ問いかけている。

東京が2020年の招致をするに当たって、都市としての哲学と思想をどのようにオリンピックを通じて具現化し、世界及び都市の課題解決にどれだけ寄与できるものと成り得るかを真に追求していかなければならない。このことを成しえなければ東京の招致は厳しいものとなるだろう。東京の申請ファイルと立候補ファイルにこのことが、はっきりと示されたときに、初めて東京は招致のスタートラインにつくことができる。

また2020年の招致活動について、国際プロモーション期間が前回に比べて大幅に短縮されたことを考えれば、ロンドンオリンピックの期間中に許されたジャパンハウスでの招致活動が非常に重要であることは言うまでもない。このロンドンオリンピックでの招致活動が、まさに招致の関ヶ原となる。ジャパンハウスでの招致活動については、東京都としても都庁全体の取組が必要であり、早急な体制づくりが求められている。

2 ミュンヘンオリンピックについて

(1) ミュンヘンオリンピックの概要

ミュンヘンオリンピックは1972年8月26日から9月11日まで西ドイツ(現ドイツ連邦共和国)のミュンヘンで行われた夏季オリンピックである。121の国が参加し、21競技195種目が行われた。オリンピック史上最悪の悲劇と言われるミュンヘンオリンピック事件が発生したことで知られている。



(出典：オリンピックパークヒアリング資料)

(2) ミュンヘンオリンピックパークについて

1966年にオリンピック招致の名乗りを上げ、1972年にオリンピック会場が建設された。着工は1969年であり、3年をかけて作り上げたもので、テント式の屋根を持った特徴的な形である。テント式の建築はミュンヘンオリンピック開催の記念として現在も保存されている。

ミュンヘンのオリンピックスタジアムは、オリンピックスタジアムとしての最初のモデルである。これ以前のオリンピックは既存の体育館や競技場で開催していたが、スタジアムを一つのパークとして、全ての施設を一か所に集約して開催した初めてのオリンピックである。

このオリンピックパークの特徴は、既存の体育館や競技場で開催した場合に各会場間の移動によって発生する渋滞をなくした点にある。このミュンヘンオリンピック以降、全てのオリンピックがパーク形式の会場で開催されることになった。

このオリンピックパークの管理はミュンヘン市が行っている。ミュンヘン市が 100%出資してオリンピアミュンヘンパーク（有限会社）を設立しており、この会社の管理でパーク経営が成り立っている。つまり、経営や施設管理は全てこの会社が担っていることになる。

予算的には 900 万ユーロが市の出費額である。この支出の大半はエネルギーコストであるが、公園という施設柄、コストを補う入場料が取れない点がネックとなっていた。運営の総額費用は 1,500 万ユーロである。現在は、文化的・国際的なイベントを行う際に利用されており、1年間で 300 のイベントが行われている。

オリンピックパークの一部には市民公園と名付けられた区画もあり、近隣の人々が自由に出入りし、ピクニックに利用されたり、時には地域のイベントに用いられたりしている。ここには 75,000 人を収容できるスタジアムがある。オリンピック後から 2005 年に至るまで FC バイアンという地元のサッカーグループにより使用されていた。現在は野外フェスタやサッカー世界選手権などの際には大きなパネル画面を取り付けて臨場感ある形で観戦できるようになっている。

オリンピックパークの建物がオリンピックホールであり、大きな会社の会議やコンサート、馬術競技などにも使用されている。また、スポーツセンターとして二つのアイススケート場や屋内競技場、さらにはプールもある。ここでは施設管理に要するエネルギーが大きいいため入場料を取っている。年間に 55 万人が訪れる施設である。イベントアリーナでは、見本市などの大きなイベントが開催される。地下が水族館となっており、年間 40 万人が訪れる。

オリンピックタワーも入場料を取っている。オリンピックパークは公園全体で 85 万 m²ある。

新しいパークの施設が地下に作られており、現在のパークともつながっている。

様々な世界選手権や国内選手権などの大会が通算 96 回開催されるなど継続的に使用されており、無駄なく使用されている。

経営状況を改善していくには多くの催し物を計画しなければならず、2年先の計画を今から立てている。とにかく新しい企画を作り続けなければならないのである。

今年は車のレースや冬場にはスキーなども開催している。これまでウエイクボード、湖の上での花火大会、ボンジョビやU 2のコンサートなども行われた。

ミュンヘンも冬季ではあるが、東京と同じように、2018年オリンピックの開催地を目指したが落選した。

1972年のミュンヘンのオリンピックで日本の男子バレーチームが金メダルを取ったが、そのトレーナーや選手達もここに来たことを思い出した。

この会社はコンサルタント事業も行っており、様々な国とコンタクトを取りつつ、過去のオリンピック開催地の経験を伝えている。

本当に難しいのは、オリンピック開催後に施設をいかに活用するかというビジョンを明確にできるかどうかにある。開催期間の17日間を有意義に過ごすことだけが問題なのではない。

アテネや北京が悪い例である。これらの開催地はオリンピック開催後に施設をどう活用するかというビジョンに欠けていたのではないか。

具体的なビジョンとして、ミュンヘンのようにそのまま利用できる形で残しておくか、ロンドンのように一時的に建てて、終わったら解体して他の用途に供するかを、開催理念に合わせて考えておく必要がある。



▲ ミュンヘンオリンピックパーク

(3) ミュンヘンオリンピックパークでの質疑応答

Q 1 オリンピックパークの経費について、年間 900 万ユーロの予算が割り当てられ、年間 1,500 万ユーロの総運営費用があるということであったが、公園利用等の収入としては、どれくらいの額があるのか。収支の状況を知りたい。

A 1 年間収入は 2,100 万ユーロ、年間支出は 3,000 万ユーロ、900 万ユーロの赤字を市からの予算で補っているという形になっている。なお、催し物の際はマージンとして 10%程度の収入がある。つまり催し物全額では 3,000 万ユーロの収入があることになる。他にここを訪れる客からの収入が年 400 万ユーロある。一人あたり 2ユーロの補助が市から出ている計算になる。

Q 2 そのような補助に対して市民の反発はないのか。

A 2 ない。オリンピックパークが市民に提供もしくは還元している利益が大きく、この点で市民にとって魅力的なものとなっているからであろう。オリンピックパークの存在が人間のよりよく生きる権利に貢献するものであると考えれば、900 万ユーロという市からの支出は決して無駄な支出ではないのではないかと。私たちの会社は市が市民に提供しなければならない利益を代わりに提供しているという論理で経営している。

Q 3 東京は 2 度目のオリンピック招致を成功させたい。そこで招致についてのアドバイスをお願いしたい。

A 3 東京への招致の成功は「レガシー」と「エネルギー」の課題に対してビジョンを持って答えを出せるかにかかっている。「レガシー」とは、オリンピックを通じて、後に何が残せるかであり、「エネルギー」は震災後の都市としてエネルギービジョンを示して、世界にアピールするものにならないといけない。

(4) まとめ

質疑応答の中で、東京招致についての課題は「レガシー」と「エネルギー」の2点であることが示された。「レガシー」については、オリンピックの施設やそれに伴って開発された施設が将来、どのように活かされていくのか、持続可能なものとなるのかという課題である。ロンドンのオリンピックパークは開催後、自然環境に配慮しつつ、持続可能な都市公園となり、周辺に建設されている選手村は、2,500戸のうち、半数がアフォーダブル住宅として活用される。ロンドンオリンピックがロンドンプランに基づき、ソーシャルインクルージョンを背景として開催されることが随所に見て取ることができた。また、意見交換では、都議会決議で求めた国立霞ヶ丘競技場の改築や周辺地域の環境整備が「レガシー」という点で高く評価されていることが挙げられた。

もう一方の課題として挙げられた「エネルギー」については、3都市の訪問地の全てで福島第一原子力発電所事故に伴う東京のエネルギー問題に対する懸念が述べられた。つまり、東京招致に当たっては、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故により生じた安全面での懸念や、根本的なエネルギーの諸課題に対して、開催都市としてどのような対策を講じていくのかが最も重要である。